

(一)初期銚港丸三船等に係る史料構成

史料	分類	船名等	表題等	作成時期又は掲載期間等	史料部	
①	契約書	第二銚港丸	「結約書」	明治13年9月(四者連盟)	A	
②		第三銚港丸	「結約書」	明治14年7月(四者連盟)	A	
③		第一銚港丸		「明治十二年八月船卸 銚港丸新造代金並諸費簿 巻号 会計係」	明治12年9月	B
④				「明治十二年八月十二日開業同三十一日迄 銚港丸利益差引簿 会計係」	明治12年9月	B
⑤				「明治十四年四月調 第一銚港丸明細差引計算帳」	明治12年8月分～同14年4月分	B
⑥				「明治廿三年八月開業 銚港丸利益金控 巻号」	明治12年8月分～同15年3月分	C
⑦		第二銚港丸		「明治十四年四月 第二銚港丸平均計算帳 篠田氏」	明治14年4月	B
⑧				「明治十三年九月開業 第二銚港丸利益金之通」	明治13年10月分～同15年3月	C
⑨				「明治十三年九月開業 第二銚港丸船代金受払差引取調簿 明治十四年四月調」	明治14年4月	B
⑩				「明治十四年七月開業 第三銚港丸利益金之通」	明治14年7月～同16年4月	C
⑪		共通		「明治十五年四月ヨリ七月迄従第一号 第三号ヲ通過不足計算割賦帳」	明治15年4月分～同15年7月分 明治15年8月25日	B
⑫				「積金証書等」	明治12年6月～同15年11月(吉岡七郎から篠田両名へ)	D
⑬				「豊田氏 汽船会計簿」	明治14年9月分～同15年11月分	C
⑭		その他		「誓願書」	明治17年6月10日(吉岡七郎から銚子汽船株主へ)	E

注1:史料②、⑩及び⑬は、流山市立博物館が所蔵している。

注2:史料部中、Bは5史料、Cは4史料が各々綴られ、他のA、D及びEは、単独史料である。

注3:史料⑧については、明治14年7月分～明治15年3月分迄は第三銚港丸のみを、明治15年4月より明治16年4月分迄は第一から第三銚港丸をまとめて記載している。

\* 本史料は、明治10年代前期の好景気、明治12年太政官布告第十六号に基づく運輸の自由化に伴う川蒸気船間の本格的競争期及び中期以降の不況期に重なる時期の実態を表す情報を提供している。

- 1、初期銚港丸三船が四者の出資による共同事業であったことが判明する「結約書」(史料①・②)
- 2、第一銚港丸建造費内訳及び四者の持株割合が記載された史料③
- 3、第一銚港丸就航時の明治12年8月12日から同年9月1日までの上り・下り別の航行日、運賃収入、乗員数、人件費及び燃料代等が記載され、収支実態が判明する史料④。
- 4、第一銚港丸に係る利益配分額、出資者への期待配戻りに基づく予想配当並びに利益配分額及び予想配当額との差額が記載され、出資金回収実態が判明する史料⑤。
- 5、第二銚港丸に係る建造費及び四者の持株割合が記載された史料⑦。
- 7、第二銚港丸建造に係る四者の出資実態及び差入時期別利子調整実態が判明する史料⑨。
- 8、持株数に応じた利益配分及び赤字となった場合の徴収額が記載された史料⑥、⑧及び⑩。
- 9、明治15年4月以降、各船別記事から三船を統合して利益配分額が記載された史料⑪
- 10、吉岡七郎が篠田両家から銚港丸建造費用を徴収した際の預かり証である史料⑫
- 11、明治17年6月、吉岡七郎が銚子汽船会社株主当て提出した請願書である史料⑬

(二)初期銚港丸三船の概要

船名	長さ	幅		総噸数	登簿噸数	馬力	船体の材料	製造年月日	製造地名	単位:円	
		前	深さ							船価(1) 「結約書」	船価(2) (海軍省報告)
第一銚港丸	78.0	12.0	4.0	19.0	16.0	10.0	木製	明治12/9/12	東京 豊洲島	4,784,086	6,500.0
第二銚港丸	72.0	12.0	3.2	16.0	13.0	16.0		明治13/9/17	東京 豊洲島	7,441,942	7,300.0
第三銚港丸	81.0	12.0	4.0	18.0	15.0	20.0		明治14/7/19	東京 豊洲島	7,088,359	7,550.0

注:「諸願窺届綴」(宝田家文書661)中の文書により作成。本資料は千葉県達第222号に基づき、「湖川港湾に限り運航する船舶」を竹袋村役場が調査し、明治17年5月8日付けで県庁に届けたもの。船価1は「結約書」、船価2は海軍省「明治18年汽船表」(明治18年)による。  
船価1は、第一銚港丸は史料③、第二、第三銚港丸は各「結約書」  
船価2は、海軍省「明治18年汽船表」(明治18年)による。但し、「汽船表」の価格は、明治18年から20年迄同数であるが、21年の記載価格は、第一銚港丸4800円、第二銚港丸6700円、第三銚港丸6500円となっている。  
背景は不明。

初期銚港丸三船経営実態表(明治12年8月～明治16年4月)

項目	第一銚港丸			第二銚港丸			第三銚港丸			三船全体		
	全体利益	月平均	一往復	全体利益	月平均	一往復	全体利益	月平均	一往復	全体利益	月平均	一往復
明治12年	658.4	142.1	4.7							658.4	142.1	4.7
明治13年	3,302.6	275.2	9.2	728.6	210.2	7.0				4,031.2	260.6	8.7
明治14年	3,430.7	285.9	9.5	2,373.0	197.7	6.6	-466.1	-62.3	-2.4	5,337.6	181.6	6.1
明治15年	71.8	7.2	0.2	76.9	7.7	0.3	-1,465.3	-146.5	-4.9	-1,316.6	-43.9	-1.5
明治16年	358.3	89.6	3.0	-255.3	-63.8	-2.1	-40.7	-10.2	-0.3	62.2	5.2	0.2
平均	7,821.7	202.5	6.1	2,923.2	110.4	3.2	-1,972.1	-137.0	-4.6	8,772.8	95.9	3.2

\* 図録23年10月 川蒸気船銚港丸の誕生と終焉 船主吉岡七郎の活躍

左記史料群から名刺12年8月から同16年4月迄3年8カ月間に3艘全体で8772円、月平均95円、一往復約3円の利益を上げていた。14年後期から不調があるものの、12、13年の獲得利益が高く、順調であった。しかし利益の89%は、第一銚港丸分であり、第二銚港丸も15年以降は振るわず、第三銚港丸は赤字であった。15年全体で1316円もの赤字をだしていたことが判明する。

(三)第一鯨港丸の建造費明細

		単位:円	
	内容	金額	
1	造船費	4,200,000	
2	附属品代	249,166	
	<b>造船費計</b>	<b>4,449,166</b>	
3	船卸祝儀	5,500	
4	仮免状費用	2,500	
5	酒差入代	2,000	
6	利子	192,497	
7	出張・隋い代	71,630	
8	開業前資金	20,160	
9	船卸諸雑費	51,182	
10	その他雑費	11,895	
11	受領祝儀額	-22,450	
	<b>附経費計</b>	<b>334,920</b>	
	<b>建造費計</b>	<b>4,784,086</b>	
	建造費当初見積額	4,500,000	
	確定建造費	4,784,086	
	不足費(徴収額)	284,086	

注1:史料③より作成

注2:第一鯨港丸に係る持ち株数については、史料③最終頁篠田両名につき「元株三」朱色で「六」に、同様に吉岡七郎の「十七」が「十四」に訂正されていた

注3:単位は円

第一鯨港丸建造明細である。作成時期は明治12年9月。第一鯨港丸の8月就航後の四者間清算時のもの。第一鯨港丸の建造費は、造船費が4449円、諸経費が334円、計4784円。建造費の当初予算額を4500円としており、284円超過していた。注目すべきは建造費原価に「利子」1192円を含めていた。不足額の徴収にあたり、建造資金の事前徴収月の前後により、支払月利1.6%(年間20%)による不足額を調整している。利子の問題は共同出資者間において頻出し、出資に際して重要事項であった。資金調達も判明した。4500円を30株一株150円としていた。宮嶋10株、(1500円)、篠田両家6株(900円)残余の14株(2100円)を吉岡七郎が出資していた。吉岡七郎が全体の47%を出資していた。下の表は、期待利回り20%、回収期間6年を意図した期待配当表である。原価に6年間の期待利回り額5740円を加え、元利合計10524円、年間1754円の利益を期待していたのである。これによれば、原価は、2年7ヶ月で回収できる見込みであった。実際は明治14年4月、1年9ヶ月で回収していた。

(四)第一鯨港丸の代金清算時における期待配当

		単位:円	
	元金	4,784,086	
	期待利回り(年)	20%	
	期間(年)	6	
	期間中利子相当額	5,740,903	
	元利計	10,524,993	
	一株年期待配当額	58,500	
	一株月期待配当額	4,900	

単位:円			
出資者	持ち株数	期待配当額	
		年	月
宮嶋宗十郎	10	594.7	48.7
篠田儀右衛門	3	175.4	14.6
篠田儀左衛門	3	175.4	14.6
吉岡七郎	14	818.6	68.2
計	30	1754.2	146.2

注:史料③より作成

(五)第二鯨港丸の建造費内訳と投下資本回収想定

		単位:円		
	内容	金額	備考	
全体	建造費	6,000,000	*	
	罫一個	300,000		
	諸費1	200,000		
	諸費2	300,000		
	諸費3	481,763		
	諸費4	160,170		
	小計	7,411,942	注2	
	13年2月より14年4月迄の利子相当額	823,125	注3 (15%)	
	総計	8,265,067	*	
	一株あたり(全体30株)	275,502		
篠田両家	13株分(篠田両家分)	4,132,534		
	13年9月より14年4月迄の受取額	573,459	*	
	差引残	3,559,074	*	
	14年5月より20年4月迄6年間の利子	4,270,889	注4 (二割)	
	元利計	7,829,963	*	
一ヵ年平均期待利益(配当)	1,304,993			
一ヵ月平均期待利益(配当)	108,749	注5		

注1:史料⑦より作成

注2:史料⑦では「7441円94銭二厘五毛」と何故か「5毛」の記載がある

注3:明治13年2月から明治14年4月まで吉岡等4名が支払った元金に対する利子相当額で表内中の利子計に一致する。

史料⑨中「集金之口」に「但年一割五分」とあり、ここは15%としていた。

注4:史料⑦中「十四年五月ヨリ二十年四月迄向六ヶ年見積 此利子二割」とある。

注5:元利計を6年間(72ヶ月)で除したものの

第二鯨港丸は、明治13年9月17日、木下・鯨子間に開業した。第二鯨港丸は、建造費明細、篠田両家の出資金及び向う6年間の期待配当額(元金の20%相当額)を期したものである。篠田両家は、第一鯨港丸と異なり、四者均等出資に同意し、両家で50%を出資することになった。直接建造費は、船体6000円、その他諸経費1441円、計7441円、他に明治13年~同14年4月迄の利息相当額が823円あり、総額8265円であった。篠田両家は、二分の一、4132円を負担し、開業後から14年4月までの配当金を控除した3559円が「回収元金となったのである。これに向こう6年間、72ヶ月分の利子相当額を加えた元利合計は7829円、これを72ヶ月で除した1月あたりの期待配当額は108円となるのであった。

(六) 第二銚港丸建造費に係る福澤造船所への支払及び利子調整

単位:円

支払・徴収 年月	金額	支出割合	篠田両家		宮嶋		吉岡		元金計	利子計	総合計
			元金	利子	元金	利子	元金	利子			
明治13年2月	500	8.10%	450	84.375	0	0	50	9.375	500	93.750	593.750
明治13年5月	1,000	16.10%	1,000	150.000	0	0	0	0.000	1,000	150.000	1,150.000
明治13年6月	2,000	32.30%	1,000	137.500	0	0	1,000	137.500	2,000	275.000	2,275.000
明治13年7月			0	0.000	0	0	350	43.750	350	43.750	363.750
明治13年8月	1,900	30.60%	500	56.250	1,400	157.500	350	39.375	2,250	253.125	2,503.125
明治13年9月	200	3.20%	0	0.000	0	0	0	0	0	0	0
明治14年4月	600	9.70%	0	0.000	0	0	600	7.500	600	7.500	607.500
計	6,200	100%	2,950	428.125	1,400	157.500	2,350	237.500	6,700	823.125	7,523.125
各人別負担元利計				3,378.125		1,557.500		2,587.500		7,523.125	
負担割合				44.90%		20.70%		34.40%		100.00%	
利子4分割金額				411.563		205.781		205.781		823.125	
利子負担調整				16.563		-48.281		31.719		0.000	

福澤造船所絵の支払時期別金額及びそれに  
対応する各人別の出資金額である。  
支払時期に対応する「利子」を算出し、四者間で  
「清算」を行っていたことが判明する。  
これによれば、第二銚港丸の建造に当たり、福澤  
造船所への支払いは、竣工前の明治13年2月以降  
竣工までに5回、5600円、竣工後7ヶ月後に600円、  
計6200円を支払っていた。四者間では、造船費の他  
関連諸費もあり、6700円を徴収していた。  
左表は、各人の時期別・出資金別による利子清算表  
である。823円は、篠田両家及び吉岡七郎が過分で、  
宮嶋宗十郎が過少となり、結果48円の調整金を宮嶋ら  
篠田両家及び吉岡七郎へ支払ったものと思われる。  
四者間で厳密に計算処理されていたのである。

注: 史料⑨より作成。利子は当該月から明治14年4月迄、年率15%により算出したもの

史料⑨は、明治14年4月、開業後7ヶ月後に作成されたもので、開業時以降に支払った金額  
を含めて7,441円94銭2厘と記載されている。この金額は「明治13年9月」の日因家のある  
第二銚港丸にかかる「結約書」記載の金額と同額であり、結約書は史料⑨と同時期に作成  
されたもの。なお第三銚港丸建造費史料は現時点では見出されていない。

(七) 明治前期における米価の変動

単位:円

年	明治10年	明治11年	明治12年	明治13年	明治14年
東京正米相場(1石)	5.11	5.99	7.04	11.75	10.09
(明治10年=100)	100.00	117.22	137.77	229.94	197.46
全国産米額(石)	24,743,791	26,599	25,282,540	32,418,924	31,359,326
(明治10年=100)	100.00	107.50	100.18	131.02	126.74

注: 田口晋吉「米の経済」明治31年、大日本実業学会 195頁より作成

(八) 吉岡七郎の借借書にみる金利水準

単位:円

契約年月日	債主	金額	金利	返済期日	備考
明治11年03月31日	越川定兵衛(発作)	100	20%	明治12年2月	
明治11年11月09日	吉岡美奈(木下)	200	20%	明治12年2月25日	
明治12年02月24日	三門孝次郎(木下)	100	20%	明治12年4月25日	
明治12年08月05日	内国通運会社	1200	18%	明治13年09月31日	元金600円及び金利
				明治13年11月30日	元金600円及び金利
明治13年12月22日	内国通運会社	1500	18%	明治14年01月30日	元金900円及び金利
				明治14年03月30日	元金1000円及び金利
明治14年11月02日	伊藤市平(別所)	100	15%	明治14年12月20日	
明治15年02月 日	三門継之助(木下)	150	15%	明治15年03月25日	
明治15年09月29日	坂巻市兵衛(布佐)	100	20%	明治12年10月25日	

\* 吉岡家文書より作成

注1: 吉岡家文書(以下すべて同じ)蔵2エ・59-11、  
注2: 蔵2エ・4、  
注3: 蔵2エ・14  
注4: 蔵2コ・24-11、  
注5: 蔵2コ・24-4  
注6: 蔵2エ・59-7、  
注7: 蔵2エ・59-13  
注8: 蔵2エ・59-15 から作成

(九) 第一鯨港丸就航月の運行実態及び売上高

単位:円

	日付	曜日	上り下りの別	金額	往復一航海の売上高	備考
1	8月12日	火	下り	0.720	1.130	
	8月13日	水	上り	0.410		
2	8月13日	水	下り	4.590	5.680	
	8月14日	木	上り	1.090		
3	8月14日	木	下り	2.880	4.290	
	8月15日	金	上り	1.410		
4	8月15日	金	下り	3.470	4.110	
	8月16日	土	上り	0.640		
5	8月16日	土	下り	23.075	36.000	17日の下りなし
	8月17日	日	上り	12.925		
6	8月18日	月	下り	22.520	32.940	19日の下りなし
	8月19日	火	上り	10.415		
7	8月20日	水	下り	18.610	20.010	22日の下りなし
	8月21日	木	上り	1.390		
8	8月21日	木	下り	30.505	56.030	
	8月22日	金	上り	25.527		
9	8月23日	土	下り	28.275	33.370	
	8月24日	日	上り	5.090		
10	8月24日	日	下り	10.380	25.030	
	8月25日	月	上り	14.648		
11	8月26日	火	下り	10.210	19.930	
	8月27日	水	上り	9.720		
12	8月28日	木	下り	11.860	21.750	
	8月29日	金	上り	9.890		
13	8月30日	土	下り	8.183	18.720	
	8月31日	日	上り	10.533		
14	8月31日	日	下り	12.685	24.770	
	9月1日	月	上り	12.089		
売上高(運賃収入)合計				303.748	303.750	
上り売上高				115.777	39.10%	
下り売上高				187.910	61.90%	
一航海平均売上高					21.70	
弁当代餅代				4.125		
総売上高				307.873		

第一鯨港丸の就航当初、明治12年8月12日から同年9月1日までの運行実態及び売上高はほぼ毎日一往復し、8月中に木下・銚子間を14往復した。

注1: 史料④より作成

注2: 史料中の売上高、(運賃収入のみ)に係る記載値合計は、303円33銭6厘であり、41銭2厘異なる。本表では修正値を記載。

(十) 第一鯨港丸就航月の支出内訳

単位:円

内容	金額	備考
<b>各所手数料</b>	30.334	一人につき1銭
銚子屋	0.795	
壁無屋	0.230	
三門屋	0.050	
絵木屋	0.020	
<b>乗客世話料合計</b>	1.095	
船長	14.000	板垣
器械師	8.000	金子
火夫	6.500	吉村
火夫	5.750	廣野
水夫	6.500	宮内
水夫	6.000	斎藤
水夫	6.000	安井
水夫	3.000	雑名
小使	1.000	伊藤
会計	15.000	不明
下足番	5.500	松本
	1.500	渡辺
船中	1.500	
<b>乗組員給料合計</b>	80.250	
乗組員食糧費	35.275	
餅代	88.895	他、含む餅代
油代	20.271	
茶炭弁当菓子仕入	6.570	
	262.960	
総売上高	307.873	
支出計	262.690	
差引	45.182	

注: 史料④より作成

支出は、全体で262円、これにより8月の収支は45円の黒字。支出中、最大のものは88円(33.3%)を占める薪、蒸気船の燃料である。当時の燃料は石炭ではなく薪である。

乗組人とある船員の給料80円(30%)  
その他、船員食料、油  
茶炭弁当菓子仕入は、船中での弁当や菓子の販売

船員は船長以下13人、器械士(機関士)、鑪焚ききの火夫2名、水夫4名、会計は補助者を含み2名、小使以下足番、その他各1名。

給与水準は、会計が最も高く、表のとおり

蒸気船が寄港する各地に切符販売する「汽船取扱人」売り上げの10%。有力旅館4軒に一人1銭の乗客世話を支払っていた。地元との共存共栄。

(十一) 第一鯉港丸に係る篠田両家への配当及び出資金回収等の実態  
(明治12年8月～明治16年4月)

項目	投下資本(出資元金)の回収				単位:円	残元金額
	配当額(6株)	期待配当額 20%/年	実配当額と期待配当額の差	Σ C		
年月	A	B	C=A-B	Σ C		
明治12年08月	8,9541	15.95	-6.9959	-6.99		956.82
明治12年09月	-3,2106	15.95	-19.1606	-26.15		956.82
明治12年10月	19,4904	15.95	3.5404	-22.61		956.82
明治12年11月	45,4100	15.95	29.4600	6.86		949.96
明治12年12月	61,0358	15.83	45.2058	52.06		904.76
12年計	131,6797	79.62	52,0597	3.17		
明治13年01月	51,4730	15.08	36.3930	88.45		868.36
明治13年02月	66,8700	14.47	52.4000	140.85		815.97
明治13年03月	70,8680	13.60	57.2680	198.12		758.70
明治13年04月	84,6820	12.64	72.0420	270.16		686.66
明治13年05月	76,3100	11.44	64.8700	335.02		621.80
明治13年06月	50,4240	10.36	40.0640	375.08		571.73
明治13年07月	75,0961	9.70	65.3961	440.48		516.33
明治13年08月	73,6128	8.61	65.0028	505.49		451.33
明治13年09月	55,6636	7.52	48.1436	553.63		403.19
明治13年10月	-2,2703	6.72	-8.9903	544.64		403.19
明治13年11月	49,8353	6.72	43.1153	587.76		360.07
明治13年12月	55,7193	6.00	49.7193	637.48		310.35
明治13年計	708,2838	122.87	585.4138	4,677.16		
明治14年01月	46,0035	5.17	40.8335	678.31		269.52
明治14年02月	48,7644	4.49	44.2744	722.58		255.25
明治14年03月	159,2682	3.75	155.5182	878.09		69.73
明治14年04月	131,1719	1.16	130.0119	1,008.10		-60.28
明治14年05月	110,4896					
明治14年06月	59,8860					
明治14年07月	117,0796					
明治14年08月	-25,2472					
明治14年09月	5,9458					
明治14年10月	24,7286					
明治14年11月	33,1238					
明治14年12月	24,9229					
14年計	736,1350					
明治15年01月	0,0000					
明治15年02月	-199,4080					
明治15年03月	-29,3950					
明治15年04月	33,0007					
明治15年05月	27,1780					
明治15年06月	7,1591					
明治15年07月	41,7574					
明治15年08月						
明治15年09月						
明治15年10月	13,5410					
明治15年11月	14,3683					
明治15年12月	47,3714					
15年計	184,3760					
明治16年01月	48,8210					
明治16年02月	-1,9055					
明治16年03月	6,1290					
明治16年04月	18,6082					
16年計	71,6527					
合計	1,832,1273					

左表は、第一鯉港丸の利益、即ち篠田両家の出資元金に対する配当金額及び元金＝出資金の回収状況の実態を表しています。  
史料⑤による出資額相当の利益配分額、史料⑤の「但月々利子二割ノ計算」(年二割の賦配)に期待配当額及び配当実績に基づく出資金の回収状況を示す。

A区分の記載数値は史料⑥等の記載値であり、算出された利益、つまり配当額である。  
B欄は、出資金に対する「元金の利子」で期待利回り相当額(年間20%相当)である。  
第一鯉港丸は、船価4784円、篠田両家は956円を出資していた。  
当初の元金額956円82銭に対し、二割の期待配当額は月額15円94銭7厘であった。  
明治12年10月、実配当額が9円49銭あり、期待配当額を初めて上回った。  
しかし、累積不足金があり、元金は減少していない。  
同年11月に至り、「金6円85銭6厘元金江丸計金949円96銭1厘残り」とあり、  
利益が累積配当不足額を超過した6円85銭6厘が元金減の原因となっていることがわかる  
以後、実際の配当額が、残元金に対して20%の期待配当額を超過した場合、  
期待配当額を超える金額を「元金ニ入レル」、つまり残元金を減じていた。

第一鯉港丸は、就航当初こそ、期待配当額を下回ったものの、その後、経営はすこぶる  
順調に推移し、明治14年4月、開業後18カ月で20%の利回りを確保しつつ、  
出資金＝投下資本の回収を達成したのであった。  
当初の元金を基本とすれば、開業後、明治12年8月～1年間の配当額は607円、  
利回り63.5%、2年目、額13年からのそれは807円、84.4%と極めて高い配当額を獲得していた。  
しかし、3年目は、56円の赤字に転落した。  
明治15年2月に実施した修繕及び1月～3月12日までの休航が影響した。  
第一鯉港丸も含め初期鯉港丸三船は、**鏡子汽船の決算書記載の状況下におかれていた。**

**第二鯉港丸の経営実態**

第二鯉港丸は、明治13年9月に開業した。第一鯉港丸と異なり、4人の均等出資である。また、  
第一鯉港丸の建造費が4784円であったのに対し、第二鯉港丸は7441円と大きく、性能とも第一鯉港丸  
と大差ないが船価は1.5倍まで急騰し、かつ篠田両家は両社で2分の1、金額で3720円、第一鯉港丸と  
比べ、持ち分は異なるものの約3.8倍もの金額を出資した。この背景は、第一鯉港丸の想定外と思われる  
高配当があり、また、米価高騰に伴う高収益の享受があった。  
史料③から分析すると、配当は順調で、明治13年、実配当額は364円、期待配当額の1.5倍もあり、  
同14年も1186円ものそれがあり、利回りは31%に達していた。  
第二鯉港丸は、第一鯉港丸が投下した資本を回収した開業18カ月目の明治15年3月までに元金の  
29%を回収し、このままで推移すれば高額となった元金も明治17年末までに回収する見込みとなること  
まで来ていた。しかし、明治15年に至り、経営環境は一転した。

**第三鯉港丸の経営実態**

第三鯉港丸は、前一船同様、明治14年7月19日、木下・鏡子間に就航した。第一鯉港丸に遅れること2年  
第二鯉港丸のそれは10カ月。しかし、就航直後から経営環境の変動を受けた。  
史料④によれば、利益、配当があったのは1年10カ月間中、4カ月のみであった。無配当ではなく、  
史料④中、明治14年9月分「不足」として「110円10銭4厘5毛」、同10月分も同様に「28円80銭2厘5毛、  
計138円90銭7厘につき、「右正に受取候也 吉岡七郎 印」とあり、前一船の時と異なり、「赤字分」を  
徴収されていたことが窺える。元金は改修どころか明治15年7月には5161円に達していたと想定でき、  
当初元金3544円の1.45倍と、逆に増加していた。

## (十二) 銚港丸全体の経営実態状況(明治12年8月～同16年4月)

(単位:円)

項目	第一銚港丸			第二銚港丸			第三銚港丸			合計		
	全体 想定利益	1往復 の利益	元金残	全体 想定利益	1往復 の利益	元金残	全体 想定利益	1往復 の利益	元金残	全体 想定利益	1往復 の利益	元金残
明治12年08月	44.8	2.5	4,784.1							44.8	3.2	4,784.1
明治12年09月	-16.1	-0.5	4,784.1							-16.1	-0.5	4,784.1
明治12年10月	97.5	3.3	4,784.1							97.5	3.2	4,784.1
明治12年11月	227.1	7.6	4,749.8							227.1	7.6	4,749.8
明治12年12月	305.2	10.2	4,523.8							305.2	10.2	4,523.8
12年計	658.4									658.4		0.0
月平均	142.1	4.7								142.1	4.7	0.0
明治13年01月	257.4	8.6	4,341.8							257.4	8.6	4,341.8
明治13年02月	334.4	11.2	4,079.8							334.4	11.1	4,079.8
明治13年03月	354.3	11.8	3,793.5							354.3	11.8	3,793.5
明治13年04月	423.4	14.1	3,433.3							423.4	14.1	3,433.3
明治13年05月	381.6	12.7	3,109.0							381.6	12.7	3,109.0
明治13年06月	252.1	8.4	2,908.7							252.1	8.4	2,908.7
明治13年07月	375.5	12.5	2,581.7							375.5	12.5	2,581.7
明治13年08月	368.1	12.3	2,256.6							368.1	12.3	2,256.6
明治13年09月	273.3	9.3	2,015.9	-48.0	-3.4	7,442.0				225.3	5.2	9,457.9
明治13年10月	-250.2	-8.3	2,015.9	341.3	11.4	7,224.7				91.1	1.5	9,240.6
明治13年11月	249.2	8.3	1,800.4	212.4	7.1	7,132.7				461.6	7.7	8,933.1
明治13年12月	278.6	9.3	1,551.8	222.9	7.4	7,028.7				501.5	8.4	8,580.5
明治13年計	3,302.6			728.6						4,031.2		0.0
月平均	275.2	9.2		210.2	7.0					485.4	8.7	0.0
明治14年01月	230.0	7.7	1,347.6	255.8	8.5	689.0				485.8	8.1	2,036.6
明治14年02月	243.8	8.1	1,128.2	311.0	10.4	6,689.8				554.8	9.2	7,818.0
明治14年03月	796.3	28.5	348.7	-37.7	-1.3	6,689.8				758.6	12.9	7,042.5
明治14年04月	655.9	21.9	-301.4	-110.7	-3.7	6,689.8				545.2	9.1	6,392.4
明治14年05月	302.4	10.1		720.4	24.0	6,085.0				1,022.8	17.0	6,085.0
明治14年06月	299.4	10.0		313.1	10.4	5,879.9				612.5	10.2	5,879.9
明治14年07月	585.4	19.5		427.1	14.2	5,544.1	11.2	0.9	7,089.6	1,023.7	14.2	12,633.7
明治14年08月	-126.2	-4.2		97.1	3.2	5,539.9	180.1	6.0	7,027.6	151.0	1.7	12,566.9
明治14年09月	29.7	1.0		42.4	1.4	5,539.9	-220.2	-7.5	7,364.9	-148.1	-1.6	12,304.2
明治14年10月	123.6	4.1		192.4	6.4	5,439.9	-57.6	-1.9	7,545.3	239.4	2.9	12,984.6
明治14年11月	165.6	5.5		182.6	6.1	5,347.9	-353.5	-11.8	8,024.6	-5.3	-0.1	13,371.9
明治14年12月	124.6	4.2		-20.5	-0.7	5,347.9	-26.1	-0.9	8,184.4	78.0	0.9	13,531.7
14年計	3,430.7			2,379.0	6.6		-448.1	-15.5		5,387.6		0.0
月平均	285.9	8.5		197.7	6.6		-62.7	-2.2		400.9	6.1	0.0
明治15年01月	0.0	0.0		-34.5	-1.1	5,347.9	-68.5	-2.2	8,387.3	-101.0	-1.1	13,734.6
明治15年02月	-997.0	-33.2		-120.9	-4.0	5,347.9	-11.1	-0.4	8,538.2	-1,129.0	-12.5	13,685.5
明治15年03月	147.0	4.9		174.2	5.8	5,282.2	31.3	1.0	8,649.2	382.5	3.9	13,911.4
明治15年04月	165.0	5.5		55.1	1.8	5,317.3	-394.9	-13.2	8,649.2	-174.7	-1.9	13,966.5
明治15年05月	135.9	4.5		23.2	0.8	5,340.4	-115.9	-3.9	8,649.2	43.3	0.5	13,989.6
明治15年06月	35.8	1.2		-28.6	-0.9	5,313.9	-292.4	-9.7	8,649.2	-283.2	-3.1	13,963.1
明治15年07月	208.8	7.0		-111.8	-3.7	5,202.1	-252.0	-8.4	8,649.2	-155.0	-1.7	13,651.3
明治15年08月										0.0		0.0
明治15年09月										0.0		0.0
明治15年10月	67.7	2.3		69.2	2.3		-192.7	-6.4		-55.8	-0.6	0.0
明治15年11月	71.8	2.4		-6.1	-0.2		69.3	2.3		135.0	0.0	0.0
明治15年12月	236.9	7.9		55.2	1.8		101.9	-3.4		394.0	2.1	0.0
15年計	71.8			76.9			-1,453.3	-4.9		-1,306.6		0.0
月平均	7.2	0.2		7.7	0.3		-148.5	-4.9		-131.6	-1.5	0.0
明治16年01月	244.1	8.1		-2.3	-0.1		-70.2	-2.3		171.6	1.9	0.0
明治16年02月	-9.5	-0.3		-513.7	-17.1		-17.2	-0.6		-540.4	-6.0	0.0
明治16年03月	30.6	1.0		119.4	4.0		-61.1	-2.0		88.9	1.0	0.0
明治16年04月	93.0	3.1		141.3	4.7		107.8	3.6		342.1	3.8	0.0
16年計	358.3			-235.3	-2.1		-41.0	-0.3		62.0	0.2	0.0
月平均	89.6	3.0		-63.8	-2.1		-19.2	-0.3		15.6	0.2	0.0
全体系	7,921.7			2,923.2			-1,872.1			8,872.8		0.0
月平均	202.5	6.1		110.4	3.2		-137.0	-4.6		175.9	3.2	0.0

注1: 本表は第一銚港丸は史料⑤、史料⑥及び史料⑩  
 第二銚港丸は、史料①、史料⑧及び史料⑩  
 第三銚港丸は、史料⑩、を用いて三船個別に作成したものを  
 合体して作成  
 注2: 全体想定利益は銚港丸各船の篠田両名分の利益全体に  
 換算したもの  
 注3: 1往復の利益は銚港丸は木下・銚子間を一日1往復して  
 おり、一月30日で計算し、利回りは、利益を元金で除したものを。

初期銚港丸三船の経営実態の復元  
 初期銚港丸三船の経営実態について、篠田両家への実際配当額から持ち株割合より全体利益を復元し、まとめた。

銚港丸草創期、明治12年8月～明治16年4月迄、3年8カ月間に三艘全体で8772円、月平均95円、1往復約3円の利益をあげていた。  
 明治14年後期からの不調があるものの同12年及び13年に上げた利益が多く、順調であった。  
 しかし、子細見れば利益の89%は、第一銚港丸であり、第二銚港丸は欠損となり、加えて明治14年までの好調さは裏腹に明治15年は  
 全体で1316円の赤字を出し、一転して経営困難に直面していた。  
 初期銚港丸三船の明治12年8月～明治16年4月の平均利回りは、第一銚港丸43.5%、第二銚港丸99.0%、第三銚港丸▲12.6%  
 三船平均10.9%であった。結果的に三船全体では期待利回りの確保はできなかった。  
 初期銚港丸三船は、明治15年7月時点で約13850円もの元金が残っていた。当時の状況から早期に回収できる状況ではなかった。  
 史料⑩によれば、明治17年6月、吉岡七郎は、当時同盟関係にあった銚子汽船の株主に向け、1700円の借入れの緊急申し出をしており、  
 一層苦しい経営を強いられれていた。四者の共同出資がいつまで継続したかは不明。

銚港丸 境・新川間運行状況表(明治24年4月)

寄航地	古布内	長谷	船形	瀬戸	三ツ堀	野木崎	船戸	布施	取手	青山
運賃	7	11	13	18	18	19	19	20	20	22
乗客数	16	1	3	1	0	5	1	0	7	1

運賃:銭/人

布佐	府川	木下	六間	安食	新川	乗客合計	運賃収入	手数料	船主収入
25	25	26	26	29	30			20%	
2	3	12	0	471	0	523	149円	29円	120円

木下蒸気船概要

船名	長さ	幅	深さ	製造地	製造年月	登簿噸数	馬力	購入代価	主な船主
信義丸	27	4.4			明治7年12月	42	20	3500	山口 コン
第一銚港丸	23	3.6	1.2	雲岸島	明治12年8月	16	10	6500	吉岡 七郎
第二銚港丸	22	3.6	1.1	雲岸島	明治13年9月	14	21	7300	吉岡 七郎
第三銚港丸	24	3.6	1.2	雲岸島	明治14年7月	15	23	7550	吉岡 七郎
第一銚子丸	21	3.4	1.2	木下	明治27年5月	31	25		吉岡 ヨネ
第四銚港丸	25	3.7	1.4	木下	明治30年6月	50	29		吉岡孝太郎
第五銚港丸	24	3.8	1.3	銚子	明治34年4月	46	32		吉岡孝太郎

明治14年前期銚港丸・信義丸 木下・銚子間時刻表

汽船名	第一銚港丸	信義丸	汽船名	第一銚港丸	信義丸
出航日	半日	丁日	出航日	丁日	半日
船長	板垣健吉	荒井武七	船長	板垣健吉	荒井武七
木下	16:00	18:00	銚子	18:00	11:00
源田	17:30	19:50	鳳栖	21:10	14:20
	17:35	20:00		21:15	14:30
佐原	19:50	21:50	石納	23:20	16:50
	19:55	22:10		23:25	17:00
笹川	21:35	0:00	田川	1:50	19:20
	21:40	0:10		1:55	19:30
銚子	23:10	2:10	木下	3:05	21:10
所要時間	7時間10分	8時間10分	所要時間	9時間5分	10時間10分

(十三)内国通運会社に係る明治10年代前期、通運丸経営実態

単位:円

	明治11年	明治12年	明治13年	明治14年	明治15年
	損益計算書				
取入計	25330	37,826,168	46,379,231	74,201,897	93,844,277
支出計	15383	21,154,020	34,012,044	71,750,348	89,514,756
利益	9947	16,672,148	12,367,187	2,451,549	4,329,521
利益率	39.30%	44.10%	26.70%	3.30%	4.60%
利回り(対船価)	26.80%	45.00%	33.40%	6.60%	11.70%

\* 蒸気船8艘簿価37009円

注:各年の「内国通運会社決算報告書」第3表より作成  
汽船は12年8艘、13年は11艘、14年は12艘、15年は14艘。

明治12年～明治15年までの内国通運決算報告書から作成した通運丸の経営実態

初期銚港丸三船と同時期の通運丸経営実態は、利益率は明治12年、44.1%

利回り、45%、空前の好成績をあげ、明治11年の通運丸にみる利益率、39.3%

利回り、26.3%を大きく上回る。

しかし、これは長続きせず、明治12年5月3日、内国通運の独占状態に終止符をうつ

太政官布告第十六号が下され、各地の同業者が相次いで出現し、状況が一変する。

特に、明治13年7月、通運丸の上利根航路と同一航路に就航した永島丸の最大の

ライバルとなり、激しい競争を展開した。同年の利益率は早くも26.7%と減少し、

利回りも急落する。競争が激化した明治14年の利益率は、3.3%、利回り 4.5%

と大幅に悪化し、過日の好成績の面影は全くなくなっていた。明治15年も同様の傾向が続いた。

初期銚港丸三船が、吉岡七郎を中心とする四者の共同出資によるものであった。  
特に、吉岡七郎及び篠田謙光が木村藤左衛門家十代木村寿松(文化5年～明治29年)の各々長男、五男として実の兄弟であったこと。  
三船の経営実態  
明治12年の就航直後から明治14年中期頃までは好景気及び業者間の競争激化前の「創業者利益」に支えられ、期待利回り20%以上の確保、予想を上回る投下資本機関の短縮をもたらした。  
しかし、その後、松方デフレ、競争の激化、コレラ蔓延等の要因が重なり、経営は急激に悪化する。  
この経営実態は内国通運及び銚子汽船の経営実態と軌を一にする。  
資金調達面では、第一銚港丸の好成績、明治10年代前期の好景気に支えられ、篠田両家が積極的な出資に応じたこと。

今後の課題は、吉岡七郎と同様、江戸期に河岸問屋を経営し、初期銚港丸三船と同時期に川蒸気船を就航させた高浜の高浜丸船主笹目八郎兵衛、及び小川の豊通丸船主井崎雄三郎等の個人船主の名義問題、資金調達の実態、蒸気船経営への進出動機などである。